■（１８１）遅れる被災学校の再建、総選挙ならば加速の議論を

一気に冬が到来すると、プレハブ校舎の肌寒さを思い出す。４０年前にさかのぼる。災害とは違い、時代は高度成長だった。都市部は児童・生徒数が急増し、教室が足りずに、校庭に仮設を次々と造った。子供としては珍しい空間で、寒いながらも楽しんだ。

被災地で、津波に襲われた学校の再建が遅れている。資材高騰や建設現場の人手不足が影響している。岩手県大槌町ではまだ、新設する小中一貫校の校舎建設が始まらない。入札で業者の示した金額が高すぎたためだ。作業員が足りずに、町の計画する時期まで完成できないのも理由だとみられている。２０１６年春だった開校予定は１年半先延ばしになった。隣の釜石市でも、２つの小中学校（同じ敷地に計画）の当初の設計案について、国から「高すぎる」と指摘されて計画を修正。規模を縮小し、鉄筋コンクリート造りから鉄骨造り、木造に変更した。開校も一部遅れ、ともに２０１７年を目指す。

震災は２０１１年３月。その年にこれらの小学校に入学した児童は卒業までずっとプレハブ校舎となる。選挙モードの国政。復興を加速させる議論を忘れないでほしい。（山）